

## 「ネオサピエンス（回避型新人類）」を読む

令和元年 12 月 6 日産経新聞記事より（文化部 桑原聡氏）

上記産経新聞の記事は大変興味ある内容で、今後の日本にとってこの指摘は極めて深刻と思えるものでした。以下に記事を紹介しますのでご一読下さい。

### 愛情の押し売り大きなお世話

先日、実業家・著述家の執行草舟（しぎょうそうしゅう）さんと雑談をしていたところ、現代日本の世相が話題となった。武士道を愛する 69 歳の執行さんと 62 歳の私にとって、異世界の出来事としか思えぬような理解しがたい事件や事象が多発している。ここ数十年で人間の質が明らかに変わってきた。卑近な例を挙げよう。自分の息子や大学の授業で相手にする学生に対しては、愛情を持って接しているつもりなのだが、彼らにはそんなことには全く関心がないように見える。よって私の愛情の押し売りは、常に徒労に終わる。彼らにとっては大きなお世話なのだろう。執行さん曰く「日本人はある限界点を超えてしまった。後戻りは難しいだろうね」

日本人のこの変化は、間違いなく激変する社会環境に起因するものであり、特に家庭環境と情報環境が決定的だったと、ともにスマートフォンすら持たぬ旧人類 2 人は推測するのであった。

そんな折、興味深い本に出合った。精神科医の岡田尊司さんが著した『ネオサピエンス 回避型人類の登場』（文芸春秋）だ。

ざっくりと内容を紹介しよう。いま現生人類から枝分かれして、新たな人類ネオサピエンスが登場しつつあるという。他者との絆に大きな価値を置く現生人類（共感型人類）に対して、ネオサピエンスとは、《他者との情緒的な関わりに喜びも関心も持たず、誰とも希薄な絆しか持たないタイプ》の人類のことで、「回避型人類」と岡田さんは命名する。

《回避型人類と共感型の旧人類の差は、肉食動物と草食動物ほども異なる。両者はまったく異なる行動スタイルと価値観を持ち、まったく別の社会を求めようとする》と岡田さんは説明する。具体的な特徴は、単独生活が基本、セックスをしない、子育てに関心がない、集団への嫌悪と恐怖をもつ、人より物・物より情報を好む、ルールと統制を重視する、キレると何をするか分からない、死を悲しまない—というものだ。

他者との絆に価値を置く愛情システムの崩壊は、産業社会の勃興とともに始まった。両親とも忙しく働かざるをえないため、かまってもらえない子供たちが多数生まれる。彼らは親の愛情や世話を期待しない回避型人間として育って

ゆく。その方が楽だからだ。大人になった彼らは、より合理的な子育てをするようになる。こうしたサイクルが数世代繰り返され、社会には目に見えて回避型人間が増えてゆく。そして IT 革命が起こる。

### なぜゲームに熱中するのか

さまざまなアプリを搭載したスマホを手にした親は、幼いわが子がそばにいても、その目はスマホの画面についつい引き寄せられてしまう。脳内では、興奮を高める神経伝達物質のドーパミンが放出され、そばにいるわが子どころではなくなっているのだ。車内に子供を放置したままパチンコに熱中して、子供を死なせる事件がいったい何件起こったことか。そのうちに子供たちも、親から与えられたスマホで遊び、脳内に放出されるドーパミンで寂しい気持ちを紛らわせるようになる。

《IT 革命の生物学的にもっとも重要な意味は、脳神経回路を組み替えるとともに、愛着システムをすっかり変容させてしまうことである。情報処理システムである脳は、無限の情報に接続できるネットワークに惹きつけられ、時間も忘れるほどのめり込んでしまうが、それは現実の人間関係を希薄化させ、情緒的な交流や親密なつながりを失わせていく》と岡田さん。

ところで、人が生きてゆくためには喜びが必要だ。回避型人間も同様だ。ただし、彼らは愛着を通して得られる喜びを失っている。そんな彼らにとって最高の喜びとは、競争に打ち勝つことだ。ただ、現実の競争で勝てるのはほんのひと握り。大半は敗者となる。そこで、誰がやっても、その人のレベルに合わせていい勝負のできるゲームが手を替え、品を替えて登場することとなった。

《回避型人間は、麻薬やアルコールに頼らなくても、(ゲームによって) 生きるために必要な喜びを得ることができるようになった》と岡田さんはいふ。なるほど。いい大人がどうしてスマホのゲームにそこまで熱中するのだろうか？と、電車の中で常々感じていた疑問に、初めて納得のゆく説明をしてもらったように思う。

### 社会の隅っこで愛を語りたい

近代を支配した価値観とは、個人の自由意志に最大の価値を置く人間至上主義であった。ところが IT 革命と AI (人工知能) の進化によって、人間の自由意志への評価は、危なっかしく、絶えず愚かな過ちを犯す一と反転しつつある。確かに、人間は独裁政治を誕生させたり、戦争を引き起こしたりしてきた。民意を基盤とする民主主義ほど危なっかしいものはない。政治も AI に任せるべきではないか、といった議論すら登場する時代となった。神にすべてを委ねた中世への後退ともいえる。こうした環境の中で、回避型人間が世の中の過半数

を占めるようになったら、社会はどうなってしまうのか、岡田さんは最終章でさもありなんと思わせる近未来社会を描出する。ぜひ読んで頂きたい。それを「合理的で理想的な社会」と感じるか、「唾棄すべき社会」と感じるかは、その人次第であろう。

19世紀初頭、英国の織物工業地帯で起きたラッドライト運動のように、スマホ撲滅運動でも起きないか、と妄想したりもするが、あらゆる社会システムがスマホを前提に構築されてしまった現在、この流れはもはや止めようがない。新しい時代は、新しい人たちに任せるしかない。もはや旧人類の出る幕ではない。そろそろ社会の隅っこで、同憂の士と酒でも飲みながら、麗しくもやるせない愛の思い出でも語り合っ、自分らしい余生を送ろうか。モンテーニュの次の言葉を言い訳にして。

《他の人々のために席をゆずるがよい。かつて、お前たちがこれに譲られたように》

注1) モンテーニュ (1533-1592) 16世紀フランスを代表する思想家。現実の人間、事象を洞察し、人間の生き方を、長短様々な〈随想〉を通して探求した主著『随想録』はフランスのみならず、世界各国に影響を与えた不朽の名著として名高い。

注2) 「ネオサピエンス」とは: 他者との情緒的な関わりに喜びも関心ももたず、誰とも希薄な絆しかもたないタイプ (岡田尊司『ネオサピエンス』)

### この記事を読み、加えて普段から個人的に思うこと

- 1) 科学技術の余りにも急激な発達は、果たして人間社会に幸せだけをもたらすのだろうか? と考えると、否定的にならざるを得ない。そもそも、人間は何をもって幸せと感じるのだろうか? (人生における幸せとは?)
- 2) 30年くらい前、メンタルヘルス関連の講義で以下の指摘を講師から聞き、なるほどと納得したことを思い出す。(工事現場での事例)
  - ・機械化以前: 親方の号令の下、皆で力を合わせて杭打ち作業を行っていた。  
お互い普段から良く知っており、その日の体調が悪い人がいたならば、動作、顔色でそれはすぐに分かった。(人との繋がり)
  - ・機械化以後: 個々に重機を使っの作業となり、人間関係が希薄でも仕事に直接支障はないが、メンタルヘルス面の管理が重要となる。  
※誰しも、額に汗をかいていれば一見で分かるが、背中にたっぷり冷や汗をかいていたとしても、それは他人には全く理解できない。
- 3) ここで言う「ネオサピエンス」化は、今後益々顕著になるのであろう。  
理由は「その方が楽」だからである。誰しも、煩わしい人間関係を避けて個人主義で生きる方が楽である。現在、24時間営業のコンビニ・スーパーを

はじめ、お金さえあれば何不自由なく暮らすことができるが、鬱陶しい人間関係を避けて生きるスタイルの根源は「核家族化」にあるのではなかろうか。個室が与えられ、家族同士の会話がなくても暮らせる環境に加え、スマホ等の発達がこの「ネオサピエンス」化を生んだが、今後これは更に加速化するであろう。（大きな社会問題となっている「引きこもり」も同根である）

- 4) 家族・知人・友人との絆を抜きにした個人主義的生き方は楽であり、若いときは何不自由なく暮らせるであろう。だが年老いて、日常生活にも支障をきたすとき、「孤独」がどれほど辛いかを彼らは想像していない（したくない）のではなかろうか。（例え死にたくても死ねない「超高齢化社会」なのに）
- 5) そもそも、人情、情愛、共感、気配り等々、他人との絆を大切にした我々旧人類の価値観と違う「ロボットの生き方」で幸せになれるとは思えない。人間とはあくまでも感情豊かな動物であり、例えどんなにAI等が発達しても、「心豊かに暮らすこと」が幸せに結びつくことを、若い人たちに伝えることこそが、我々旧人類の余生におけるせめてもの役割ではなかろうか。

以上

令和元年（2019年）12月15日 守山裕次郎